

台湾現地校から学ぶこと

— 現地校との交流活動を通して —

前台北日本人学校 教諭

神奈川県川崎市立三田小学校 教諭 小松 朋 英

キーワード：現地理解教育，交流，福祉教育

1. はじめに

台北日本人学校では、近隣の現地校と交流をもち、小学部1・2年生は士東國小、3・4年生は蘭雅國小、5・6年生は天母國小、中学部は天母國中との交流活動を毎年行っている。在勤3年間の中で最後の年は、世界的に新型コロナウイルスが大流行してしまい、交流を行うことが叶わなかったが、2年間続けて3年生を担当した時に交流をもった蘭雅國小と、新規に交流をお願いした啓明学校との交流活動について書かせてもらいたいと思う。

2. 蘭雅國小との交流

交流方法：両校各クラス6人～7人を受け入れて実施した。4時間扱いとし、2・3時間目を交流授業、1時間目と4時間目は移動の時間とした。昼食込みでの交流も考えられたのだが、現地校が給食で日本人学校がお弁当であるという不便さからも2時間での1日交換留学を計画したものである。

＜蘭雅國小への訪問＞

3日間に各クラス6人～7人に分かれて蘭雅國小のクラスに日本人学校の児童が入り、授業を受けさせてもらった。一緒に4年生も行ったのであるが、4年生は2年目（昨年に続き2回目）の交流ということもあり、顔や名前を覚えている児童もいて、開始当初から溶け込んでいる児童が数多くみられた。休み時間には、手作りの名刺を交換して自己紹介したり、校庭で遊んだりしていた。また、お互いの授業の相違点を見つけたり、意欲をもって学習に

取り組む様子が見られた。

＜台北日本人学校＞

各クラスに6人～7人の児童が入り、日本人学校の授業を受けてもらった。蘭雅國小の子どもたちも緊張している様子だったが、次第に慣れた様子だった。こちらでも名刺交換をしたり、校庭の遊具に案内して遊び方を説明しながら一緒に遊ぶ様子が見られた。日本人学校の子どもたちの中には、中国語を話せる児童も多いことから、その子たちが教師の指示を通訳して交流の支援にあたってくれることも少なくなかった。



＜蘭雅國小の休み時間に大縄で交流＞

教師の立場からすると、これらの交流は決して楽な活動ではない。交流の主目的は、

- ① 現地校に通う同年代の児童・生徒とのふれ合いを通して、異文化理解・現地理解を深めること
- ② 交流を通して、伝え合うことの大切さを学び、互いを思いやる気持ちを持つこと

であった。このねらいを達成するために正味2時間の交換留学を行っているわけであるが、この2時間の授業構想がちょっとした研究授業のようなものになる。6～7人の日本語の分からない子どもたちが授業参加をして、何ができるのかを一生懸命に考えた。毎年の反省で教師にかかる負担が大きいため、授業は「特別授業」ではなく普通

授業を普通に参加して受けることが望ましいと、教員間で基本合意されていた。しかし、日本語の全く分からない子どもを交えながら（その子どもたちの存在に配慮しないで）国語や算数の授業を普通に進めることは来てくれた台湾の子どもたちに申し訳ない気がして、何とか一緒に参加できる可能性のあるものを考えた。下記は私が実践した授業プランである。

プラン1) 自己紹介を簡単にしてもらった後、言葉を使わないで行えるコミュニケーションゲーム

例) ①身長順に整列してみよう ②誕生日がはやい順に整列しよう 等

*言葉を使わないので、言葉の壁を感じることなく小グループで競わせたので、盛り上がった。

プラン2) 書道「ひらがなを書いてみよう」

*「にじ」をみんなで書いた。台湾の子どもは現地校で毛筆を学んでいるが日本独特のひらがなは書いたことがなく、一生懸命に取り組む様子が見られた。書いた作品をそのまま持って帰ってお土産にしたところ「お母さんに見せるんだ」と大喜びしていた。

プラン3) 体育「ドッジボールをしよう」

*最初にルール確認を日本人学校の中国語を話せる子どもに行ってもらい、楽しく活動ができた。

プラン4) 音楽「リコーダー&合奏・合唱」

*現地校でもソプラノリコーダーは使用しているので、もってきてもらい一緒にリコーダー演奏をした。

プラン5) 図工「プレゼントカードを作ろう」

*作り方を説明し、カードを作成した後は、作品を持ち帰ってもらったので、これも喜んでいた。

プラン6) 社会「日本と台湾の買い物比較」

*「買い物調べ」を行った後に、台湾の買い物の特徴・傾向等を授業参加した台湾の子どもたちから聞いて日本との比較を行った。

(共通事項) プラン4・5は専科(現地採用の台湾人)の先生にお願いしたこともあり、指示も中国語でスムーズに通じ、台湾の子どもたちも何不自由なく楽しそうに活動していた。また、どのプランでも基本的な指示だけは私が中国語(北京語)で補足説明を行い、それでも理解できなかった子どもには国際家庭(両親のいずれか或いは両方が台湾人)の子どもに通訳をお願いした。

(児童の感想1)

- | |
|---|
| <p>○言葉で話し合うというよりは、動作でコミュニケーションをとるということの大切さを知りました。訪問した時はみんな親切で、本当にうれしかったです。</p> <p>○日本人学校の中国語学習の中では、結構話せると思っていたのですが、実際に話してみると話すスピードが速くてなかなか聞き取ることができませんでした。でも、蘭雅の人たちもゆっくり話そうとしてくれたのが分かりうれしかったです。</p> <p>○言葉は違って心は通じるんだということが分かりました。名刺交換をしましたが、あまり会話をすることができませんでした。今度(来年)交流を行う時には、是非、もう少し中国語を上手になって日本人学校の校内をしっかりと案内できるくらいになりたいです。</p> |
|---|

(児童の感想2)

- どんなに言葉が違っていても「仲良くなろう」という気持ちさえあれば、仲良くできることを学びました。思っていたほど、仲良くなることは難しいことではありませんでした。これからも積極的に台湾の人たちと関わっていきたいと思いました。
- 蘭雅國小を訪問して学んだことは「やさしさ」です。最初に声をかけるのは緊張してなかなかできませんでしたが、名刺交換をきっかけに仲良くなり「請多多指教（よろしくお願いします。）と言ったら意味が通じて喜んでくれました。また、私に分からないことを教えてくれ、「やさしさ」を感じました。

3. 啓明（視覚障害）学校との交流

小学校3年生の社会科で行う単元に「学校のまわりの様子」というものがある。学校たんけんを生活科で行った後に、できたら屋上等の見晴らしの良いところで東西南北の方位を学習しながら、どの方向に何があるのかということ学習していくものである。そして実際に確認をし、地域に出てインタビュー等の情報を得て、学習にいかしていく活動を行う。台北日本人学校では、地域（天母）たんけんをしていく中で、地域で多くの家庭が利用している「高島屋」のそばにある学校みたいなどころは何なのか？という子どもからの疑問が出た。「他の学校と違って自由に出入りができないよ」「学校の前には点字つきの横断歩道があるよ」等いろいろな意見が出た中から、「啓明学校」という学校が盲学校というものだという正解にたどり着くことができた。

私たち3学年の学級担任3人は現地採用教員1名と共に啓明学校を訪問した。交流をお願いするためである。毎年小学部は決まった3校と交流活動を行っているが、そこに「福祉」の心を育てたいという担任の想いが一致してのことであった。日本では「道徳」を学習しているが、台湾に来て「道徳」の必要性を改めて感じた。公共交通機関に乗ると幼児2人を抱えている私を見ると、言葉もろくに話せない私にジェスチャーで席を必ず誰かが譲ってくれるのである。必ずである。これは来台以前に日本ではあまり経験したことのない優しさであった。台湾の道徳心に感心させられると同時に日本人の道徳心のなさが恥ずかしく思えてくるぐらいであった。こうした経験は担任3人ともに大なり小なり経験しており、「何かの機会に子どもたちに福祉教育を行いたいね」ということを常々話していた。そうした中、学習の中で自然に出てきた「よく分からない学校・啓明学校」の存在は逆にチャンスだと考えた。地域との交流や台湾の人との触れあい・交流は毎年行って頂いている現地校と交流として継続していき、例え年齢が上の人たちだとしても自分たちよりも生活するのに不自由さがある人たちに対して、何ができるのだろうかということを考えさせたかったのである。

以下2点のねらいのもとに交流活動を行うことにした。

- ① 啓明学校の児童・生徒と関わる中で、目の不自由な人たちのことを思い、相手の気持ちを考えようとする心を育むこと。（人の気持ちを考える心の育成）
- ② 啓明学校との交流を通して、目の不自由な人に対する天母の町づくりや日本人学校の施設設備を改めて見直そうとする意識をもつ。（よりよい福祉社会実現に向けての意識向上）

両校の教職員で打ち合わせをした中で、それぞれ子どもたちがお互いにどのような交流が可能かを考えておくことが確認されていた。

<啓明学校から>

啓明学校は盲学校であることから、按摩師として活躍するために学校で支援学習を行っている旨を聞いた。そして、授業の一環として、日本人学校の子どもたちに按摩（マッサージ）の方法を教えてもらう（体験させてもらう）という交流を行った。（次ページ写真右参照）手の構え方からもみ方、つぼ等を教えてもらい実際に揉んでもらってその気持ちよさを体験し子どもたちは大喜びであった。

<日本人学校から>

子どもたちは私からの「どんな交流をしたい?」という投げかけに対して、当初は「けいどろをしたい」「ドッジボールがしたい」「大縄がいいな」等自分がやって楽しい遊びを自己中心的に挙げていた。そこで弱視(眼鏡・コンタクトレンズをつけても視力0.3もない)の人たちがほとんどで、全盲(全く見るができない人)もいることを伝えると次第に交流の仕方について考え、悩む姿が見られ始めた。一生懸命に考え悩んだ末に決めた交流(遊び)の方法は次のようなものであった。



<交流例>

- ①伝言ゲーム
- ②風船の中に鈴を入れ、音を頼りに床に落とさないようにするゲーム
- ③これは何でしょうゲーム(手で触って触れた物が何かを当てるゲーム)
- ④ヒントゲーム(第1ヒント・・・第2ヒント・・・第3ヒント・・・と出題して当てるゲーム)
- ⑤音がなるボールを用意して、みんなで目隠しをしてそれを速く取りに行く競争

これらのゲーム(遊び)は子どもたちが自分たちで考えたほんの一例である。ゲームが円滑に進行できるように、実際に自分たちで目隠しをしてみてゲームが楽しめるかどうかをリハーサルして確かめる等の様子が見られた。交流当日の子どもたちの役割分担は下記の通りである。

～役割分担～

- 司会・進行役 ○歩行時の付き添い・案内人 ○初めのあいさつ ○終わりのあいさつ ○交流・遊びのルール説明 ○通訳 等

<児童の感想>

- 交流を通して、地域にある施設の意味が分かるようになった。(点字ブロック・点字押しボタン・点字自動販売機・エレベーターの押しボタン点字・駅の切符自動販売機の点字等)
- 目の不自由な人は何もできないのかと思っていたけど、不自由なくできることも結構あってびっくりした。
- 何をどう手伝ったらいいかの方法(歩行時の支援)を知ることができてよかった。今までやっていた方法はおせっかいだったことを知った。
- 目の不自由な人が身近にいなかったから、「怖い」というイメージがあったけど、みんなすごく優しくってうれしかった。
- 啓明学校の先生も目の不自由な先生がいてびっくりした。目が不自由なのに先生をしているのはすごいな。